

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



27

よろこびの知らせ
第27集

目 次

| | |
|-----------------|----|
| イサクの誕生 | 1 |
| 創世記 4:1-4 | |
| 祝福された人 | 10 |
| ルカ 1:39-45 | |
| 逆転の救い | 18 |
| ルカ 1:46-55 | |
| いる場所がなかった | 27 |
| ルカ 2:1-7 | |

ここに収められたメッセージは、2021年12月にテキサス州
プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたも
のです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

イサクの誕生

創世記 21:1-7

21:1 主は、約束されたとおりに、サラを顧みて、仰せられたとおりに主はサラになされた。

21:2 サラはみごもり、そして神がアブラハムに言われたその時期に、年老いたアブラハムに男の子を産んだ。

21:3 アブラハムは、自分に生まれた子、サラが自分に産んだ子をイサクと名づけた。

21:4 そしてアブラハムは、神が彼に命じられたとおりに、八日目になった自分の子イサクに割礼を施した。

21:5 アブラハムは、その子イサクが生まれたときは百歳であった。

21:6 サラは言った。「神は私を笑われました。聞く者はみな、私に向かって笑うでしょう。」

21:7 また彼女は言った。「だれがアブラハムに、『サラが子どもに乳を飲ませる。』と告げたでしょう。ところが私は、あの年寄りに子を産みました。」

一、神の約束

神はアブラハムに「わたしは、あなたが見渡しているこの地全部を、永久にあなたとあなたの子孫とに与えよう。わたしは、あなたの子孫を地のちりのようにならせると約束されました（創世記 13:15-16）。また、こうも言われました。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。…あなたの子孫はこのようになる。」（同 15:5）神はアブラハムの子孫を空の星、地のちりのように増やすと約束されたのですが、そのとき、アブラハムには子どもがありませんでした。

た。妻のサラは不妊のまま二人とも年齢を重ねていました。しかし、アブラハムは、何のしるしも見えないときでも、神を信じました。神が何かをしてくださることを信じただけでなく、神がご自分の言葉に対して真実なお方であることを信じたのです。創世記 15:6 に「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」とあります。アブラハムは、あのこと、このことではなく「主」ご自身を信じたのです。神が喜んでくださる信仰とは、神ご自身を信じること、神のご人格を受け入れることです。

アブラハムもサラも、神を信じ、神に従っていましたが、神の約束の成就を待ちきれなくなりました。それで、サラは自分に仕える女奴隷によってアブラハムの子を得ようとし、アブラハムと女奴隷との間にイシュマエルが生まれました（創世記 16 章）。そうしたことは、当時、後継ぎのない家庭ではよく行われていたことでしたが、アブラハムは、今まで持っていた信仰から離れ、人間的な手段に走ってしまったのです。

では、イシュマエルがアブラハムの祝福を受け継ぐのでしょうか。いいえ、祝福を受け継ぐ者は、神の言葉通り、アブラハムとサラとの間に生まれる子でなければなりません。イシュマエルが生まれて 13 年経ったとき、神はアブラハムに現れ、サラについてこう言われました。

「わたしは彼女を祝福しよう。確かに、彼女によって、あなたにひとりの男の子を与えよう。」（創世記 17:16）
聖書には、アブラハムは、これを聞いて「笑った」とあります。それは不信仰の「笑い」でした。「百歳の者に

子どもが生まれようか。サラにしても九十歳の女が子を産むことができようか」（同 17 節）と、神の言葉を疑ったのです。サラも同じでした。サラもまた心の中で笑って神の言葉を信じませんでした。神は言われました。

「サラはなぜ『私はほんとうに子を産めるだろうか。こんなに年をとっているのに』と言って笑うのか。主に不可能なことがあるか。わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなたのところに戻って来る。そのとき、サラには男の子ができています。」（創世記 18:13-14）神は、アブラハムやサラの不信仰にもかかわらず、アブラハムへの約束を取り消されませんでした。そして、アブラハムとサラとの間に子どもが授かると告げられたのです。アブラハムは、神の言葉によって信仰を取り戻していききました。

二、アブラハムの信仰

多くの人々は、信じる対象は何であっても、「信じる心」があればそれでいいのだと言います。信じる心があれば、心が安らかになり、人にも寛容になることができ、苦しいことにも耐えられるようになるでしょう。宗教心や信仰心にはそうした力があります。しかし、もし、信じていることが間違ったことであつたらどうするのでしょうか。その信念が強ければ強いほど、間違いが大きくなります。たとえば「輸血をしてはいけない」という教えを信じ込んで、自分の家族の命を救わない人もあるのです。誰を信じ、何を信じるかはとても大切なことです。

また、自分は何をしても長続きしない。「信仰を持つ」といっても、きっと途中でくじけてしまうだろうと考えて、神を信じることをためらっている人も多いと思います。そう考えるのは、自分の信仰心で自分を救わなければならないと思っているからです。確かに、聖書は私たちに信仰を求めています。イエスも「あなたの信仰が、あなたを救った」（マルコ 10:52、ルカ 7:50）と言っておられます。しかし、それは人間の信仰がその人を救ったという意味ではありません。神の救いの力が、信仰を通してその人に働いたということを行っていますのです。人を救うのは神です。人間の「信仰心」や「宗教心」にはその力はありません。信仰は神の力を受け入れる通路です。「信仰によって救われる」というのは、神の救いが信仰という通路を通して人のうちに働くということです。

また、信仰を保ち、養うことは、自分の力ですること、できることではありません。信仰を支え、養うものは「神の言葉」です。神の言葉は、信仰というランプに注がれる油のようなものです。アブラハムは繰り返し神の言葉を聞くことによって、消えかかっていた信仰のともしびをもう一度輝かせることができました。「信じよう」「信じなければ」とりきんでも、信仰が強くなるわけではありません。心静かに神の言葉に聞くときに、はじめて信仰の目が開かれ、神の言葉を心に蓄えることによって、信仰は神の言葉を養分として育っていくのです。

ローマ 4:18-22 は、この時のアブラハムの信仰について、こう言っています。「彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、『あなたの子孫はこのようになる』と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが生かされても同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。」

アブラハムは不信仰のうちに 13 年を過ごしたため、彼は百歳、サラは九十歳になってしまいました。子どもを生む希望が消えていました。しかし、人間の力が失われたときこそ、神の力が働くのです。「神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました」とある通り、アブラハムは人間の力でも、自分の信仰心でもなく、約束を守り通してくださる神の真実と、約束を実現してくださる神の全能とに信頼したのです。いや、真実で全能の神への信頼を取り戻したのです。

三、イサクの誕生

そして、約束のとおりアブラハムとサラに男の子が生まれました。その子は「イサク」と名付けられましたが、「イサク」とは「笑う者」という意味です。アブラハムもサラも、最初、二人に男の子が生まれると聞いた

とき「笑い」ました。「そんなことがあるわけがない」という不信仰の笑いでした。しかし、今、アブラハムとサラは、イサクの誕生を喜び、祝って、笑っています。これは信仰の笑いです。詩篇 126:1-2 にこうあります。「主がシオンの捕われ人を帰されたとき、私たちは夢を見ている者のようであった。そのとき、私たちの口は笑いで満たされ、私たちの舌は喜びの叫びで満たされた。」神が私たちの信仰をリバイブしてくださるとき、不信仰の冷たい笑いは消え、心からの喜びを伴った笑いがあふれます。私たちも「私たちの口を笑いで、私たちの舌を喜びの叫びで満たしてください」と祈り求めたいと思います。

創世記 21 章は、神の約束が成就して、ひとりの男の子が生まれたことを告げています。奇蹟によって生まれた赤ん坊イサクがサラの膝の上に眠っています。この光景は、クリスマスの光景とよく似ています。

創世記には、イエス・キリストを予告するさまざまな事柄があります。神は、アダムとエバが罪を犯したとき、「女のすえ」が人を罪の束縛から救うと約束してくださいました。神はノアに「箱舟」を作るように命じ、それがノアの家族の命を救いました。これらはみな、救い主を預言するものです。神はアブラハムを召し出して、彼によってあらゆる民族が「祝福」されると約束されました。そして神はアブラハムにイサクを与え、アブラハムへの祝福の約束が確かなことを示されました。イサクは奇蹟によって生まれました。イエスもまた奇蹟に

よった生まれました。処女が子どもを産むという奇蹟ですが、その背後には、神の御子が人となるという、さらに大きな奇蹟があります。イエスの誕生はイサクの誕生よりもはるかに大きい奇蹟ですが、イサクの誕生はイエスの誕生を予告するものとなっています。神は、アブラハムに対する約束がどんなに真実なものであるかを示すため、イサクを特別な方法で生まれさせました。同じように、神は、全人類への救いの約束がどんなに真実であるかを示すため、処女が子を産むという奇蹟を起こしてくださったのです。

また、イエスの母となったマリアとサラとの間に共通するものがあります。それは、二人とも「神、主に不可能なことはない」という言葉を聞いたことです。サラは「主に不可能なことがあろうか」という言葉を聞き、マリアは「神にとって不可能なことは一つもありません」という言葉を聞きました。

マリアに御使いが表れ、告げた言葉はこうでした。「ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みまします。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」（ルカ 1:31-33）マリアはこの言葉に答えて、「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知らないのに」と言いました。すると御使いは「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなた

をおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます」と答えてから、「神にとって不可能なことは一つもありません」と言いました（ルカ 1:34-37）。

サラにとって子を産むとことは、にわかには信じられないことでしたが、それは長年願ってきたことであり、彼女にとって喜びでした。しかし、マリアにとって、御使いのお告げは、受け入れがたいものでした。マリアは結婚して子を産むことがどんなことかを理解していました。妻となって子を産み、母となることは、彼女にとって望むところだったでしょう。しかし、御使いのお告げは、今、彼女の胎内に神の御子が宿ることなのです。未婚の彼女が子を産むことは、ユダヤの社会では、刑罰を受けなければならない恐ろしいことでした。御使いはマリアに「おめでとう、恵まれた方」と言いましたが、御使いが伝えた知らせは、もし、神を信じていなければ、マリアにとってめでたいものでも喜ばしいものでもなく、恐怖であり、残酷な仕打ちでしかったのです。けれどもマリアは、御使いの言葉を受け入れました。

「神にとって不可能なことは一つもありません」との言葉を信じ、自分の身を献げたのです。マリアは、たとえ人の目には不可能に見えても、神が、その全能の力によってすべてを成し遂げてくださる。自分も守ってくださると信じたのです。

私たちは、不信仰だったときのアブラハムやサラのように目に見える状況だけでものごとを判断し、人間的な

方法に頼って問題を解決しようとしてきました。そして、さまざまな失敗を重ねてきました。「いくら神さまでもそんなことはできない。奇蹟は他の人には起っても、私には起こらなかったし、これからも起こらない」と言って、神の真実や力を制限してきました。イサクの誕生に、そして神の御子の誕生の中に神のご真実とそのお力が表れています。神の御子のお生まれを思うこのシーズンに、それを見つめ直しましょう。そして、真実な神への信頼を御言葉によって養っていただきましょう。

(祈り)

主なる神さま、私たちは創世記の中に、救い主イエス・キリストを預言する数々のものを見てきました。イサクの誕生もイエスのお生まれにつながる出来事でした。あなたは御子を世に遣わされる何千年も前から人類の救いを約束し、それを備えてこられ、実行してくださいました。感謝します。「神にとって不可能なことは一つもありません。」 私たちもそう言い表して、あなたの全能を信じ、あなたの真実に信頼することができますように。主イエスのお名前です。

祝福された人

ルカ 1:39-45

1:39 そのころ、マリヤは立って、山地にあるユダの町に急いだ。

1:40 そしてザカリヤの家に行き、エリサベツにあいさつした。

1:41 エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。

1:42 そして大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。

1:43 私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう。

1:44 ほんとうに、あなたのあいさつの声は私の耳にはいったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。

1:45 主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」

クリスマスが近づくと、普段はクリスチャン・ミュージックと無縁な店でも讚美歌を流すところが多くなります。曲だけでなく、歌も歌われます。神の救いや、救い主イエスのことが歌われ、人々がそれを耳にするのはとても良いことです。

また、この時期にはイエスの母マリアのことも歌われます。「アヴェ・マリア」はその代表的なものです。多くの著名な作曲家が「アヴェ・マリア」を作曲していますが、たいてい、ラテン語のまま歌われるので、多くの人は曲の美しさを楽しむだけで、歌詞を心に留めていません。「アヴェ・マリア」の歌詞は前半と後半に分かれていて、前半は聖書の言葉がそのまま使われています。

“*Ave Maria, gratia plena, Dominus tecum.*” は「おめでと

う、マリア、恵みに満たされた人。主はあなたとともに」という意味です。ルカ 1:28 で、御使いがマリアに現れたときに言った言葉そのままです。次の “*Benedicta tu in mulieribus, et benedictus fructus ventris tui, Jesus.*” は「あなたは女の中で祝福された人、あなたの胎の実、イエスも祝福されています」という意味です。これはマリアがエリサベツを訪ねたとき、エリサベツがマリアに言った言葉で、ルカ 1:42 にあります。「アヴェ・マリア」は、クリスマスの物語の Annunciation（受胎告知）と Visitation（エリサベツ訪問）を歌っています。

一、マリアの訪問

マリアが訪ねたエリサベツは祭司ザカリヤの妻で、マリアにとっては叔母にあたる人です。彼女には長い間子どもが与えられませんでした。高齢になって、子を産むことをあきらめていたときに、夫ザカリヤに御使いが現れ、こう告げました。「エリサベツに男の子が与えられる。名をヨハネとつけなさい。その男の子はやがて来られる救い主のさきがけとなる。」（ルカ 1:13）その言葉の通り、エリサベツは子どもを宿しました。彼女は大事をとって五ヶ月の間家にひきこもり、六ヶ月目を迎えました。

そのときエリサベツは、出産までの間、身の回りの世話をしてくれる人を必要としていました。エリサベツの身近には、出産や育児を経験した女性たちが大勢いて、彼女を助けることができました。ところが、彼女は、そうした人を選ばず、遠くの、しかも、未婚のマリアを選

びました。なぜでしょうか。そこには神の特別な導きと聖霊の示しがあったからです。

41 節に「エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた」とありますが、エリサベツが聖霊の働きを受けたのは、このときがはじめてではないと思われます。4ヶ月から5ヶ月して胎児が動くのを感じるようになったころから、神の言葉を実現させる神の力を身をもって体験し、聖霊によって神との深い交わりに導かれていったと思われる。

エリサベツの妊娠六ヶ月目というのは、ちょうど MARIA が、御使いのお告げを受けた時でした。エリサベツは、MARIA が救い主イエスの母として選ばれたことを、聖霊の示しによって知っていました。エリサベツの子ヨハネには、生まれる前から救い主に仕えるという務めが与えられていることも、エリサベツには示されていたので、エリサベツはぜひとも、わが子が仕えるようになる救い主の母となる MARIA に会いたいと願ったのでしょう。

エリサベツには、MARIA の実際的な手助けが必要でした。しかし、それ以上に MARIA との信仰の交わりが必要でした。MARIA にもエリサベツとの信仰の交わりが必要でした。MARIA は、エリサベツの出産の直前まで三ヶ月の間、一緒にいました。神を愛し、神の救いが世に現れることを待ち望んでいたエリサベツは、自分の子ヨハネが準備し、MARIA の子として生まれるイエスが成し遂げ

ようとしている救いについて、マリアといろいろと語り合ったことでしょう。エリサベツと共に過ごした三ヶ月は、イエスの母として選ばれたとはいえ、まだ年若いマリアを強め、支えるのに、大きな力になったことと想われます。

二、エリサベツの祝福

さて、エリサベツを訪ね、その門をくぐったマリアはまず、自分のほうから丁寧に挨拶をしました（40節）。ところが、エリサベツから返ってきた言葉は、「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう」でした（42節）。古代には、年上、年下の区別がはっきりしていました。年下の方は年上の方を敬い、年上の方は年下の方にはそんなに丁寧には接しませんでした。ところが、エリサベツは、自分の子どもほどの年齢の若いマリアを「私の主の母」と呼んで、マリアに自分の母親に対するような尊敬を表したのです。エリサベツとマリアの立場が入れ替わっていました。

エリサベツにとって最も大切なお方は主です。その主が人となり、処女マリアを母として、この世に生まれ出ようとしておられます。エリサベツは、主を「私の主」として崇める人でした。それで、その主の母となるマリアを、自分の「姪」としてではなく、「主の母」として敬ったのです。

「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。」ここで、エリサベツは二度「祝福されている」という言葉を使っています。この言葉には二重の意味があります。人に対して使われる時には、「祝福がありますように」という意味になりますが、神に対して用いられるときは、神を「崇めます」、「礼拝します」、「ほめたたえます」という意味になります。ですから、最初の「あなたは女の中の祝福された方」というのは、マリアを祝福している言葉ですが、次の「あなたの胎の実も祝福されています」というところは、マリアに宿っておられるイエスこそ、「祝福さるべき方」「崇められるべき方」、主であるという意味になります（テモテ第一 1:11、6:15-16 参照）。イエスが「祝福されている」「祝福に満ちている」というのは、イエスが私たちの礼拝を受けるべき神であることを言っています。マリアが受けた祝福は、彼女の胎内にいる「祝福に満ちたお方」からの祝福だったのです。エリサベツは、その祝福を認めて、マリアを「祝福された人よ」と呼び、彼女の胎内に宿られたイエスを「祝福されるべきお方」として崇めたのです。

三、祝福の秘訣

神の御子の母となるという祝福は、後にも先にも、マリアにだけ与えられたもので、特別なことの中のさらに特別なことです。では、マリアへの「受胎告知」やマリアの「エリサベツ訪問」は、マリアにとっては大切なことであっても、私たちには当てはまらないものなので

しょうか。いいえ、聖書は、神を信じる者がマリアのように「祝福された人」になることができると告げており、その秘訣を教えています。それは、45節の「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう」という言葉です。

マリアの祝福、幸いは、神の言葉にまごころをもって耳を傾け、それを信じ、受け入れたことにありました。聖書は、いたるところで、祝福された人生、幸いな生活を神の言葉と結びつけています。詩篇 1:1-2 には「幸いなことよ。悪者のはかりごとには歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ」とあり、詩篇 119:1-2 には「幸いなことよ。全き道を行く人々、主のみおしえによって歩む人々。幸いなことよ。主のさとしを守り、心を尽くして主を尋ね求める人々」とあります。箴言 16:20 には「みことばに心を留める者は幸いを見つける。主に拠り頼む者は幸いである」と言われています。

あるとき、イエスの教えに感動したひとりの女性が「あなたを産んだ腹、あなたが吸った乳房は幸いです」と言いました。「こんなに素晴らしい人物を産んだ母親はなんと素晴らしいことか」という意味です。イエスの母がうらやましいと思ったのでしょうか。しかし、イエスはそれに対してこう答えました。「いや、幸いなのは、神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」（ルカ 11:27-28）

また、あるとき、イエスが人々を教えておられるとき、母マリアと兄弟たちがイエスに会いに来ましたが、大勢の人のために、イエスに近づくことができませんでした。それで、弟子のひとりがイエスに「あなたのおかあさんと兄弟たちが、あなたに会おうとして、外に立っています」と告げました。そのとき、イエスはこう言われたのです。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行なう人たちです。」（ルカ 8:19-21）

こうした言葉は、イエスが母や兄弟たちに対して冷たい態度をとったように聞こえますが、決してそうではありません。イエスは母マリアが、他の誰よりも「神のことばを聞いてそれを行う人」であることを知っていました。イエスの兄弟たちも、最初はイエスに反対していましたが、イエスの復活ののちは、信仰を持ち、教会の一員に加えられています（使徒 1:14）。人の本当の幸いは、御言葉を聞いて、信じることにあるのです。皆さんは、この幸いを体験していますか。神の言葉はいつでも、「そうだ、その通りだ」と理解できるものばかりとは限りません。エリサベツの夫ザカリヤは、エリサベツに子が生まれるという知らせを聞いたとき、「そんなことがあるだろうか」と疑ってしまいました。私たちも自分の小さな知恵や経験だけで神の言葉を推し量って、神のみこころの大きさを見ないことがあります。また、聖書を教訓の言葉と読むだけで、「自分にはこんなことはできない」、「今度も、神の言葉を守ることができなかった」と落胆してしまうこともあります。聖書には確

かに戒めがあり命令があります。しかし、それがすべてではありません。その戒めを守れず、命令に従うことのできない私たちの罪を赦し、受け入れ、強め、恵んでくださるという「よい知らせ」（福音）や約束の言葉で満ちているのです。神は、あなたを救う、赦す、癒やす、守る、あなたと共にいて、あなたを祝福する、万事を益とすると約束しておられます。たとえよく理解できなくても、目に見える状況が約束の言葉とは正反対のようであっても、神の言葉を信じましょう。それに頼りましょう。

「受胎告知」と「エリサベツ訪問」の物語は、毎年、クリスマスのシーズンに読み、聞きますが、今年は、このことから御言葉を聞いて、信じて与えられる祝福に心を留めましょう。「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」私たちもこの幸いをいただきましょう。御言葉を聞いて信じる「祝福された人」となり、その幸いを味わうお互いでありたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、聖書の中に、歴史の中に、また、私たちのまわりに、神の言葉を信じて生きた幸いな人々の良い模範を数多く置いてくださいました。マリアは「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人」でした。私たちもこの模範に倣わせてください。マリアと同じ信仰と祝福とを私たちにもお与えください。主イエスのお名前です。

逆転の救い

ルカ 1:46-55

1:46 マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、

1:47 わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。

1:48 主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。

1:49 力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、

1:50 そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。

1:51 主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、

1:52 権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、

1:53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。

1:54 主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもべイスラエルをお助けになりました。

1:55 私たちの先祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」

きょうの箇所にあるマリアの祈りは、「マニフィカト」、あるいは「マグニフィカト」と呼ばれます。ラテン語で “*magnificat anima mea Dominum*”（「あがめます。私の魂は、主を」）という言葉で始まるからです。ここから作られた音楽作品ではバッハの「マニフィカト」（BWV 243）が一番有名です。日本語の讃美歌には「わが心は」というタイトルで讃美歌 95 と新聖歌 67 に収められています。どれも美しい曲ですが、曲の美しさだ

けに心を奪われることなく、そこで歌われている内容を理解して、マリアの祈りを自分の祈りとしたいと思います。

一、賛美と感謝

「あがめます」という言葉で始まるように、マリアの祈りは、神をあがめる賛美の祈りでした。祈りには五つの要素があります。「賛美」、「感謝」、「悔い改め」、「願い」、「とりなし」です。そして、祈るときにはこの順序で祈るのが良いと思います。祈りを賛美から始めるのです。

「賛美」と「感謝」には違いがあります。「感謝」は、神が自分にしてくださったことを思って、神にお礼を言うことです。しかし「賛美」は、自分には感謝できるようなことが何もないと思えても、神であるゆえに、つまり、神があらゆるものの造り主であり、あらゆるものを超えて偉大なお方であるゆえに、神をあがめるということです。様々な不幸や苦しみに見舞われたとしても、神は変わることなく、主権者であり、栄光のうちにおられ、愛と恵みに満ちておられます。自分の状態がたとえどうであっても、神を神として神をほめたたえる、それが「賛美」です。

このような賛美をした人に、ヨブという人がいました。ヨブは、神を信じる正しい人で、神の祝福を受け、多くの子どもと財産を持ち、人々から尊敬されていました。ところが、その財産が奪われ、子どもたちも皆、亡くなってしまいました。しかし、ヨブはこう言って、神

を賛美しました。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」（ヨブ 1:21）「自分にとって感謝なことがあるうがなかろうが、神は常にほめたたえられるべきお方である」という信仰をヨブは持っていました。ヨブはこの後、重い病気にかかり、さらに大きな苦しみに投げ込まれるのですが、神への信仰を保ちました。そして、最後にはかつての祝福を取り戻します。苦しみの中でヨブを支えたのは、ヨブの神を賛美する信仰と、賛美から来る力でした。これは「賛美の力」と呼ばれ、多くの人がその体験を受け、それを語っています。

マリアは、ヨブのように苦難に遭ったのではなく、むしろ、救い主の母となるという幸いを受けたのですが、それでも、未婚のマリアにとって、神の御子を産むことは、大きなチャレンジでした。そのことを、すぐに、幸いなこと感じるができなかったかもしれません。しかし、マリアは、主を見上げ、主を賛美しました。「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。」（46-47節）そして、そのように主を賛美することによって、救い主の母とされたことの幸いを確信し、それを感謝することができるようになりました。「主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう」（48節）と言われている通りです。

私たちも、祈るときには、まず、神を賛美することから始めましょう。そうすると、不思議なことに、感謝なことがひとつひとつ思い起こされてきます。今朝目覚めることができたこと、今日も神が私を生かしてくださっていること、身体に痛みがあり、手足が弱っていても、この唇が動いて神に祈ることができること、この目で神の造られた世界の美しさを見ることができること、この耳で神の言葉を聞くことができること…。感謝なことが次から次へとも出てくるのです。賛美から感謝が生まれ、希望と忍耐を与えられ、困難を乗り越えていくことができるようになります。これが「賛美の力」です。

二、力とあわれみ

「あがめます」（マニフィカト）という言葉は、英語の “magnify” に相当します。拡大鏡のことを “magnifying glass” と言うようにこれには、「大きくする」という意味があります。ですから、「主をあがめる」というのは「主を大きくする」ということです。けれども、それは、主が小さいお方だから、人間が大きくしてあげなければならないということではありません。主以上に偉大なお方はありません。49-50 節で、マリアは主がどんなに偉大なお方であるかを語っています。「力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。」

主は「力あるお方」です。主にはどんな不可能なこともありません。また、主は「聖なるお方」です。神の

「聖（きよ）さ」は、人間の正しさや善良さをはるかに超えています。主から見れば、人間の正しさもボロ布のようであり、人間の善良さも利己的で不純なものでしかないのです。

ですから、主は、人間によって「大きく」してもらふ必要などないのです。主はもとから偉大なお方です。ところが、人間は驕り高ぶって、自分を大きくし、神を小さくしてきました。人間はその知恵・知識によって、この世界の成り立ちを知るようになりました。そしてそれを利用して様々なものを作り出してきました。とは言っても人間が知っていることは世界のごく一部であり、できることも僅かなことです。なのに、自分たちは何でもできる、知恵・知識を積み重ねれば、人間は「神になる」と考えるようになりました。しかし、それは、エデンの園で蛇が言った嘘です。偽りです。欺きです。人は、造り主である神を否定することによって、生きる意味や目的を見失い、自分を虚しいものにしてしまいました。

コインのような小さなものでも、目の上に乗せれば、それで目が塞がれてしまいます。同じように、人間の驕り高ぶりが、人間の目を塞いで、主の偉大なことを見えなくさせています。「主をあがめる」とは、マリアが自らを「この卑しいはしため」と呼んで自分を小さくしたように、主の栄光を妨げないということです。

マリアは主の偉大な力と、主の聖（きよ）さのゆえに主をあがめましたが、さらに、その「あわれみ」のゆえ

にも主をあがめています。主が全知・全能のお方であったとしても、聖なるお方でなければ、主は独裁的な暴君のようになってしまいます。また、主が聖なる方であっても、あわれみ深いお方でなければ、私たちは主に対して恐れ、おののくだけで神に近づくことができません。しかし、主は、罪深い者を赦し、小さな私たちをも愛して、祝福してくださる、あわれみの神です。しかも、主の「あわれみ」は気まぐれな、一時的なものではありません。50節に「そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます」とある通り、主のあわれみは変わることはないものです。

この神のあわれみのゆえに、小さな私たちも、偉大な神、聖なる主を人々に表すことができるのです。皆さんのスマートフォンについているカメラのレンズは、とても小さいものです。しかし、そんな小さなものでも大空を写すことができ、大自然を捉えることができます。私たちの小ささは、主をあがめ、主を証しするのに妨げにはなりません。むしろ、小さいからこそ、主がご自分を示されるのを妨げずに済むのです。パウロは自分を「すべての聖徒たちのうちで一番小さな私」（エペソ 3:8）と呼びましたが、同時に、「私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める」（ピリピ 1:20）と言っています。「すばらしさが現わされる」とあるところには、マリアが「あがめます」と言ったのと同じ言葉 “magnify” が使われています。主は、そのあわれみの

ゆえに、私たちを通して、ご自分を大きく示してくださるのです。

三、逆転の救い

主を賛美し、主の力とあわれみについて語ったマリアは続いて、主の救いについて語ります。51-53 節の言葉は、救いの預言です。「主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。」ここで使われている動詞はすべて完了形です。「しました」、「散らしました」、「引き降ろしました」、「引き上げました」、「満ち足らせました」、「追い返されました」という言葉が使われています。将来起こることが預言の言葉が完了形で書かれるのは、それが、神のみこころの中ですでになさされていて、必ず実現することを表すためです。イエスがその救いのみわざを成し遂げられるのは、この時からおよそ 30 年後のことですが、ここでは、そのことがすでに成されたかのようにして語られています。

ここには、「高ぶっている者」が追い散らされ、「権力ある者」が王座から引き下ろされ、代わりに、「低い者」が高く引き上げられる、また、「富む者」が無一物になり、「飢えた者」が満たされるとあります。権力の座に座って高ぶっていた者が裁かれ、彼らによって卑しめられ、低められていた人が高められるというのです。この時のユダヤはローマの軍事力に支配され、ローマか

ら税を吸い上げられていました。人々は貧しさにあえいでいました。救い主が来て、ユダヤをローマの権力から解放してくれることを人々は願っていました。ところが、イエスは、この世の権力者でも、富める者でもなく、低く、貧しいお姿でおいでになりました。それによって低い者を高め、貧しい者を満たすためでした。この救い主の身の上で起こった「逆転」は、神の愛による「逆転」です。

人々は、イエスが自分たちの描いていた政治的、軍事的な救い主でなかったので、イエスをキリストとして、信じ、受け入れませんでした。イエスが罪の赦しや神の国について教えると、イエスから離れて行きました。主であるお方を低め、栄光に富んだお方を貧しい者のように扱いました。さらに、こともあろうか、正しいお方を罪に定め、祝福に満ちたお方をのろいの木、十字架にかけ、いのちの主を殺したのです。彼らは神の栄光ではなく人間の栄誉を求めました。神の愛に裏切りをもって答えたのです。なんと逆さまなことでしょう。これは、救いに対する、罪による「逆転」です。人々は、罪によって神の救いをひっくり返してしまったのです。

では、もう救いは無くなってしまったのでしょうか。いいえ、イエスは死を滅ぼし、復活されました。昇天され、もとおられた父なる神のもとに帰られました。そこから、聖霊を注いでくださいました。救いの「逆転」が起こったのです。人間の罪は神の救いをひっくりかえしましたが、イエス・キリストは、さらにそれを逆転し

て、赦しといのちを私たちにくださったのです。罪人が聖徒にされ、神の国を受け継ぐという逆転の救いを成就してくださったのです。

マリアが預言した通りのことが成就しました。私たちはそれを目の当たりにしています。この救いは、今、私たちの手の届くところにあります。だれでも、イエス・キリストを信じるなら、たとえ、罪の深い泥沼に沈んでいたとしても、そこから引き上げられ、高められます。神から離れ、虚しさの中に生きていたとしても、救い主によって満たされるのです。この「逆転」の救いを体験していますか。イエス・キリストを信じ、マリアとともに、「あがめます。私の魂は、主を」と、主に向かって、賛美をささげましょう。救われた身の幸いを、心いっぱい、感謝しましょう。

(祈り)

主なる神さま、あなたの救いは逆転の救いです。つらく、苦しい時が続いても、あなたを信じる者に、あなたは、かならず逆転の時を与えてくださいます。たとえこの世で結果を見ることができなくても、天では、それが逆転し、信じる者は栄光に包まれます。そのことを堅く信じ、あなたをあがめます。私たちを通してあなたがあがめられることを願い求めます。そのことを実現してください。主イエスのお名前です。

いる場所がなかった

ルカ 2:1-7

2:1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た。

2:2 これは、キリニウスがシリアの総督であったときの、最初の住民登録であった。

2:3 人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。

2:4 ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

2:5 身重になっていた、いいなずけの妻マリアとともに登録するためであった。

2:6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、

2:7 男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

一、受け入れられなかった救い主

「孤独は山になく、街にある。一人の人間にあるのではなく、大勢の人間の『間』にある。」日本の哲学者、三木清の言葉です。一人で山に登り、テントを張ってそこで過ごしても、孤独を感じません。けれども、山から降りて、人々の間で生活を始めると、かえって孤独を感じます。大勢の人がいても、誰も自分に関心を持ってくれないという寂しさです。じつに、「孤独は山になく、街にある」のです。

マザー・テレサが日本に来たとき、こう言いました。

「今朝、私は、この豊かな美しい国で孤独な人を見ました。この豊かな国の大きな心の貧困を見ました。」多く

の人が大勢の人の中で孤独を感じています。会社のグループの中で、学校のクラスで、友人たちや、家族の中でさえ、「自分は受け入れられていない」、「自分はここにいなくてもいい人間なんだ」、「いや、ここにはいけない人間なんだ」といった疎外感を感じながら生きています。誰ともつながることができない孤独な心、それは、まさに、マザー・テレサが言う「心の貧困」です。そして、疎外された心ほど、傷つけられた心はありません。多くの人がそうした心の傷を抱え、それを癒やされないままに生きています。

聖書が描くクリスマスの物語は、私たちの救い主が疎外された人々の中に、孤独のうちに生まれたことを告げています。マリアがヨセフとともにベツレヘムに行ったのは、ローマの人口調査に登録するためでした。「人口調査」といっても、アメリカで10年ごとに行われる「センサス」のようなものではありません。このときの住民登録は、ローマ市民の特権を受けるためのものではなく、逆に、ローマに隷属する者となって税を収める義務を負う者となる、そのための登録でした。ヨセフは、ユダヤのダビデ王の子孫で、世が世であれば、ユダヤの王となったかもしれない人です。ところが、この登録によってローマの奴隷となろうとしていたのです。このときのユダヤの人々は、世界の中で見捨てられ、疎外された民でした。救い主は、そんなユダヤの民の一人として、お生まれになったのです。

それだけではありません。救い主イエスは、同じユダヤの民からも受け入れられませんでした。ユダヤの人々には、やがて救い主が遣わされるとの約束が示されていて、人々は救い主を待ち望んでいました。しかし、人々が、イエスに求めたのは、罪の赦しとそこから来る祝福、神の国での永遠の幸いではなく、ローマからの独立であり、ユダヤ民族の政治的な復興でした。それなのに人々は、自分たちの救い主を、自分たちが一番憎んでいたはずのローマの総督の手に引き渡し、十字架につけてしまったのです。イエスは、ご自分の民にも受け入れられず、斥けられた救い主でした。

赤ちゃんが生まれる時には、ふつうなら、お産をするための清潔な部屋が用意されます。ところが母マリアのためには、一部屋もなく、イエスを出産したのは、家畜小屋でした。当時の家畜小屋はたいてい小高い丘のふもとをくり抜き、そのほらあなの入り口に申し訳け程度の柵をつけたものでした。救い主は、暗くて、臭くて、汚い家畜小屋で生まれたのです。ルカの福音書は「宿屋には彼らのいる場所がなかったからである」と言っています。イエスが家畜小屋で生まれたことは、ヨハネ 1:11に「この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった」とあることを、目に見える形で描き出したものと言えるでしょう。

救い主は、まずはユダヤの人々のところに遣わされましたが、決してユダヤの人たちだけの救い主ではなく、すべての人の救い主です。世界に 80 億の人々がいても、

神はただお一人であり、救い主もただお一人です。聖書は「神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです」（テモテ第一 2:5）と教えています。

ヨハネの福音書は、その第1章で、「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった」（ヨハネ 1:1）と言って、救い主を「ことば」と呼んでいます。また「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった」（ヨハネ 1:4）とも言って、救い主を「いのち」、また「光」と呼んでいます。ここでの「ことば」には、ものごとの「根源」という意味があります。そして、根源にあるものは常に一つです。この世界のすべては神によって造られ、命あるものはすべて神によって生かされています。ですから、救い主が「ことば」と呼ばれ、「いのち」と呼ばれるのは、当然のことです。救い主が「光」と呼ばれるのは、私たちが光によってものを見ることができるよう、救い主が私たちに神を見せてくださったからです。イエスによらなければ、誰も、私たちが造り、愛し、救ってくださる神がおられることも、神によって造られた私たち一人ひとりがどんなに価値あるものか、何のために生かされているのかを知ることができなかつたでしょう。光は聖さや喜びなどを表します。罪の暗闇から私たちを救い出し、私たちの心を照らし、歩むべき道を照らしてくださるのは光であるイエス・キリストです。

ところが、私たちは、光であるキリストに背を向けてきました。ヨハネ 1:10 に、「この方はもともとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった」とあります。この「世」という言葉には、ユダヤの人々だけでなく、世界のすべての人が含まれます。ヨハネ 1:10 は、世界のすべてが救い主を受け入れなかった、また、ヨハネ 1:11 は、神の民とされた人々さえもそうだったと言っているのです。

それでも、神は、私たちに光を届けようとしておられます。今日、世界中のほとんどの人が「クリスマス」を祝います。「きよしこの夜」を歌います。「きよしこの夜、星は光り、救いの御子は、まぶねの中に、眠りたもう、いとやすく。」この歌は、イエスが救い主、神の御子であることを教え、そんなお方が馬小屋の飼い葉桶に寝かせられたのはなぜかを考えるようにと、私たちに問いかけています。クリスマスのイルミネーションを見ると、キリストがくださる光、いや光であるキリストによって心を照らしていただきたいと願いましょう。

二、受け入れてくださる救い主

ヨハネ 1:10 と 11 は私たちがイエスを受け入れなかったと言っていました。ところが、1:12 は、イエスが私たちを受け入れてくださると言っています。「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」イエスは、ご自分が人々から斥けられたにもかかわらず、ご自分のところに来る者を受け入れ、神の子どもとしてく

ださるのです。「神の子どもとされる特権」、それはどんな「特権」なのでしょう。罪を赦されて、神に近づくことができるという特権です。神を「父」と呼んで、神の家族の一員にされるという特権です。あるサンデースクールの教材に、「あなたも王子さま、王女さま」というレッスンがありました。神はあらゆるものの主です。王です。そうであるなら、神の子どもとされるとは、天のロイヤル・ファミリーの一員となるということです。

「あなたも王子さま、王女さま」というのは、その通りなのです。救い主イエス・キリストを受け入れるとき、神から遠く離れていた私たちも、神を天の父とする神の家族に受け入れられるのです。クリスマスはイエスのお誕生を祝うだけでなく、私たちが神の御子によって神の子どもとして新しく生まれたことを喜ぶときでもあるのです。イエス・キリストを信じた者は、この喜びを知っています。そのことで一つのお話をして終わりたいと思います。

ベンという男の子がいました。ベンはテネシー州のニューポートで生まれましたが、同じテネシーの東部の丘のふもとの町に移ってきました。ベンの母親は結婚せずに彼を産みました。その時代には、そうした母親とその子どもは、まわりの人々から、のけものにされたり、非難されたりしました。親たちもまた、自分の子どもを未婚の母の子どもと遊ばせないようにしました。

ベンが大きくなるにつれて、他の子どもはベンに「お前の父さんは誰なんだ」などといってからかいました。

ベンは、学校で遊び時間にはひとりで自分の席に座っていました。プレーグラウンドで他の子どもたちからいじめられないためでした。ランチもひとりで食べていました。

ベンが12歳になった、ある夏のこと、その町に新しい牧師がやって来ました。ベンは、この牧師のよい評判を聞きました。それまで一度も教会に行ったことがありませんでしたが、ある日曜日、教会に行き、その牧師から話を聞こうと思い立ちました。ベンは、誰にも会わないですむように、教会に遅く行って、後ろの席にそっと座り、礼拝が終わらないうちに帰りました。

週を重ねるにつれ、聖書のメッセージに心が惹かれていきました。6回目の日曜日には、メッセージを聞いて心がいっぱいになり、早く帰るのを忘れてしまいました。

礼拝が終わると、同じ年齢の子どもたちがベンを取り囲み、ベンはそこから抜け出せなくなりました。やっとの思いで抜け出そうとしているとき、誰かがベンの肩に手を置きました。振り返って、見上げてみると、牧師がにっこり笑っていました。そして牧師は、ベンが一番聞きたくない質問をしました。「君は誰の子どもだい？」

皆が静かになりました。ベンは皆の目が自分に向けられているのを感じて心が沈みました。ベンは思いました。「この牧師は違うと思っていた。でも、この人も同じだった。…早く外に出たい。でも、どうやってここから抜け出せるのだろうか。」ベンが何かを言おうとしたとき、その牧師は、こう言いました。「君が誰の子ども

か知ってるよ。家族もみんなここにいるじゃないか。君は神の子どもだよ。」牧師はベンの背中をたたいて言いました。「君は神から大きな使命を受け継いでいるんだ。さあ、行って、それに恥じない生活をなさい。」

その日からベンの生涯は変わりました。テネシーの町の小さな田舎の教会で、彼はキリストを信じる決心をしました。ベンは天の父の子となったのです。

この少年ベンが、のちにテネシー州の下院議員（1893-97）、第31代テネシー州の知事（1911-15）になった Ben W. Hooper です。州知事であった間彼は、女性の労働者や子どもたちのために尽くしました。知事を退任した後も、鉄道労働者の待遇改善のために働きました。

彼の死後、その自伝が『望まれなかった少年』という題で出版されました。けれども、実際は、彼は「神に望まれて生まれた」子だったのです。「望まれなかった子ども」などどこにもいません。すべての子どもは、どんな境遇にあっても、すべて神に望まれ、神に愛され、神を愛する者として生まれてくるのです。私たちの誰ひとり例外ではありません。しかし、この世では、多くの人が疎外され、孤独を感じています。私たちの救い主はその痛みと悲しみを知っておられます。この救い主を受け入れるとき、孤独と疎外の傷は癒やされます。神の子どもとしての新しい人生が始まるのです。ルカ 2:7に「宿屋には彼らのいる場所がなかった」とありますが、あなたの心にも救い主イエスを迎える場所がないのでしょうか。いいえ、誰の心にもその場所があります。心に不安

や孤独、虚しさを感じる場所がありませんか。心のどこかに疼く傷がありませんか。そここそ、救い主イエス・キリストを迎える場所です。そこに救い主を迎えるとき、あなたの心は満たされます。そして、ほんとうのクリスマスを祝うことができるのです。

(祈り)

父なる神さま。私たちがあなたに受け入れられ、あなたのもとに近づくことができるために、「ことば」であり、「いのち」であり、「光」であるイエス・キリストを私たちのところに遣わして下さったことを感謝します。私たちはあなたの御子を受け入れず、斥けてきたのに、あなたは、そのような私たちにさえ忍耐をもって呼びかけ、あなたの子どもとして受け入れてくださいました。あなたの、この大きく、深い愛を知って、救い主を受けれる人々をひとりでも多く与えてください。イエス・キリストのお名前です。



Penguin Club
www.penguinclub.net